

を理解しながら読むことができる。山地研究者のみならず、観光やエコツーリズム、少数民族、森林資源などに関心をもつ幅広い読者にとっても興味深い議論を提示しており、広く勧めることができる。また、著者の示す、エコツーリズムや環境運動が一般の人々にどう受容されているのか、という問題提起は、2010年にカレンの焼畑をユネスコの世界遺産に登録するための委員会が立ち上がった現在、そしてカレンの人々がおかれている状況の今後を考えるうえでも非常に重要である。タイのカレン社会を研究する後輩として、著者の今後の展開にも期待したい。

鈴木正崇.『ミャオ族の歴史と文化の動態—中国南部山地民の想像力の変容』風響社, 2012年, 560p.

宮脇千絵*

本書は、中国西南部に居住するミャオ族の儀礼活動に焦点を当て、ミャオ族が豊かな想像力でもって培ってきた世界観を描くとともに、それが近年の経済的発展や政治・社会状況の影響などによりどのように維持されているのか、あるいは変化しているのかを記述している。

本書は八章から成り、1988年から2010年のあいだに発表された9本の論文をもとにした集大成である。以下に各章の内容の簡単な紹介をし、評者の見解を述べる。

第一章「ミャオ族の神話と現代—貴州省黔

東南を中心に」では、ミャオ族の神話の変化と差異性が宗教文化の再構築に果たした役割について論じている。著者によると文字をもたないミャオ族の神話は豊かな想像力を原動力とする口頭伝承で伝えられ、儀礼と連続性をもっていた。しかし、1980年代以降の「民族文化」を重視する動きの高まりのなか、民族意識の再構築の源泉として、民族エリートや知識人によって、神話が文字テキスト化される。これにより、神話が画一化され、儀礼との連続性が失われ、さらには神話が読み替えられることによって新たな言説が創造された。新たな解釈が儀礼や日常生活に浸透することを、著者は「可視化される神話」と呼び、それが、無文字という「周縁」、地理的「辺境」を生きるミャオ族の中心に対する対抗言説であると同時に、宗教文化の再構築の道であることを示唆している。

第二章「祖先祭祀の変容—貴州省黔东南雷山県烏流寨の鼓社節」では、13年に1度おこなわれる祖先祭祀である鼓社節について1997年に調査した事例をもとに詳細に描き、既往文献との比較検討をおこなっている。そして過去と現在の鼓社節の共通項として、木鼓叩きと水牛の供犠の重視があることを指摘している。一方で、変化もしている。鼓社節を支える組織は、祖先を同じくする父系親族集団であったが、現在その担い手は、血縁から地縁へ、そして行政の関与へと移行していること、ならびに経済や社会の変化の影響を受け、客人への土産があつた世の祖先を満足させるための水牛の肉から、この世の人びとの身近にある豚肉へと変わったことも指摘し、

* 国立民族学博物館・外来研究員

改革開放以後に新たに復興しつつある鼓社節は、かつての想像力に支えられた世界観に基づく儀礼とは異なっていることを示した。

第三章「死者と生者—貴州省黔东南三都水族自治县小脑村の鼓社節」では、1999年の調査に基づき、生者と死者の関係に焦点を当て、鼓社節の葬送儀礼としての側面を取り上げている。祖先祭祀である鼓社節には、死者と生者の関係を再構築し、この世の生活を活性化するという役割がある。しかし生活様式が変わった現在、水牛の供犠による供宴の慣行は継続しているものの、死者や祖先の靈魂を迎えるという意識は弱まっていること、さらに観光化によって、観光客向けにおこなう儀礼と、村人の慣習による儀礼とのあいだに摩擦がおこっており、想像力の世界がどう変化しているのかを分析している。

第四章「ミャオ族の来訪神—広西壮族自治区融水苗族自治县の春節」は、自称タムー（他称は青苗）と呼ばれる人びとが暮らす村々を春節に訪れる来訪神の儀礼、蘆笙の祭り、祖先祭祀などを1993年のデータに基づいて検討し、春節という農事暦を区分する「境界の時間」での、儀礼を通じた人びとの時間認識の形成とその変化を考察している。経済発展や観光化によって、春節期間の親族との交流や男女の恋愛に漢族の時間概念が浸透していること、そして「民族文化」の再構成のため地元政府の働きかけで再編された祭りが増えていることを指摘し、正月行事に表出されるミャオ族の時間認識が変化している様子を描いている。

第五章「ミャオ族の巫女さんたち—湖南省

麻陽苗族自治县の場合」は、漢語で「仙娘」と呼ばれる巫女に焦点を当てて、1998年時点での彼女らの活動と、世界観の諸相を明らかにしている。「仙娘」は、「走陰」や「差七姑娘」という活動を通じて想像力の世界であるあの世に行き、そこで神霊や死者の霊と交流する。著者は、今まで報告が少なかった都市部に住む「仙娘」の実態と、そこを訪れる相談者の依頼による「走陰」や「差七姑娘」の活動内容を見聞に基づいて記述することにより、仙娘の存在意義の背景には、都市と農村の交流の活発化という現象があることを指摘している。

第六章「龍船節についての一考察—貴州省黔东南台江县施洞鎮」は、龍船節と姉妹節という、観光現象に最もさらされている祭りに着目しそれぞれの由来譚を紹介したうえで、龍船節と姉妹節をそれぞれ鼓社節と比較している。龍船節は、他の祭祀と同様に、ミャオ族の生活を成り立たせる秩序を再構築するとともに、より新たな人間相互の結びつきを獲得する機会だとされる。しかし2000年代以降の観光化によってその象徴的な意味が失われ、祭祀が経済的活動に取り込まれていったり、口頭伝承の文字テキスト化によって、豊かな想像力の世界が固定化され一元的に流通したりという状況がみてとれることを論じている。

第七章「銅鼓の儀礼と世界観についての一考察—広西壮族自治区南丹県」では、白褲瑤の人間観・社会観・世界観が凝縮されている銅鼓を取り上げている。ヤオ族に分類される白褲瑤を著者が取り上げるのは、言語や習俗

からみると白褲瑠はミャオ族の系統と考えられるからである。銅鼓は父系血縁集団によって所有され、単なる楽器ではなく葬送儀礼においてあの世とこの世を結びつける機能をもつ。興味深いのは、彼らは銅鼓を生産せず市場で購入することである。使用に特化しているために、逆にその音色には彼らの想像力が多分に凝縮されていると著者は指摘している。

第八章「貴州省の観光化と公共性—ミャオ族の民族衣装を中心として」では、グローバル化に伴う観光化に焦点を当て、社会の新たな「公共性」との接合や葛藤によって、記号性や象徴性といった想像力の媒体であった民族衣装が日常の文脈を離れ、その意味を再構築しているさまが描かれている。その事例として、貴州省黔東南州と雲南省文山州が挙げられている。前者では、民族衣装が観光客の「まなざし」によって日常着から商品へと変化している様子が、後者では、日常生活の文脈において普段着が既製服へと移行し、海外へと販売されている様子が示されている。ともに外部の介入、意味や機能の変化が指摘され、グローバル化と公共性によって伝統の変化と再編を論じている。

以上みてきたように、本書で描かれているのは、ミャオ族の儀礼や生活文化における伝統と、口承の文字テキスト化、政治の介入、観光化やグローバル化などの要因による、ミャオ族の想像力に裏打ちされた神話世界や象徴性の変化や再編である。本書の現地調査による実証的で詳細な記述、特に丹念で克明な儀礼の内容の報告は、参照価値の高い民族

誌として読み継がれていくだろう。以下、評者が感じたことを述べたい。

本書の特徴は、広範な地域の、さまざまな自称のミャオ族の支系の事例を取り上げていることである。改めていうまでもなく、ミャオ族というのは「民族識別工作」により定められた集団であり、その内実は多様な集団の集まりである。しかし、多様な下位集団の事例の併記は、視点や内容の一貫性が確保しにくくなるというリスクを有する。著者自身もそのことは十分認識しており、「各章の方法論は一貫しておらず、それぞれ単独の論考として読むことができる」(p. 12) と断ったうえで、多岐にわたる内容を整合させるため「想像力」という概念を導入している。各章では、鼓社節や葬送儀礼、正月行事や巫女の活動などの原動力としての想像力の世界の豊かさの記述と、その変容に重点がおかれており、著者のいうように、「過去から現在への変化の動態と、今後の行方を考察するという時間認識を包括するための概念」(p. 2) として有効である。ただ欲をいえば、全章を貫く総括を著者がどのように準備していたのかを知りたかった。それがあれば、想像力という概念をもって多様な事例を併記した意味がより効果的にあらわれるとともに、個々の事例の共通性と独自性が一層明確になっただろう。経済的・社会的変化の波は、時間差こそあれどの地域にも同じように押し寄せている。それは各事例で共通している。だがその対応には、それぞれの地域や下位集団によって、著者が描いているよりもっと独自性がみられるのではないだろうか。

その一例として、評者の研究内容にひきつづき指摘すると、第八章では民族衣装の変化として、貴州省の自称ムーと雲南省の自称モンの事例を混合させて記述しており、ムーの事例に基づいて、モンの実態を解釈しようとしているように感じられた。たとえば、「グローバル化の影響によって生活着であった民族衣装が、商品となり、生活の文脈から切り取られている」(p. 475)、「衣装は現在では自らの集団や他の支系に対しての自己表現の機能を喪失させ、イベントや観光客向けのデザインを競う道具となった」(p. 488)との記述があるが、少なくとも雲南省においては、モンの人びとの生活の変化に沿った彼ら自身の取捨選択の基準が存在しており、彼ら

の生活の文脈とは断絶していないと評者は考えている。

とはいえ、本書の現地調査に基づいた記述の詳細さは圧倒的である。現在、外国人調査者の滞在が以前よりも可能になり、インテンシブな調査による成果の蓄積がすすんでいく。多様なミャオ族の全体像を描くことよりも、個々の事例の詳細を積み上げていくことが今後の趨勢だとすれば、本書による広範囲を網羅した民族誌的記述は、その課題に取り組むための比類ない指南書となる。大著である本書が、評者を含めこれからの中国少数民族研究の一翼を担う者にとって、最良の手引きとなってくれることは間違いない。